

図書館員としてのキャリア構築支援への課題

～短期大学における司書資格取得の意義とやりがい～

永 野 篤

(キャリア開発総合学科)

I. 目的

図書館は知識と情報の拠点として社会に不可欠な存在であり、そこを支える司書の役割はAI時代においても重要な位置を占める。本学では、短期大学生が司書資格を取得し、卒業後に図書館で専門職として活躍できるよう支援している。しかし、卒業後の職場環境やキャリアの継続における課題については十分に把握されていない。学生のキャリア構築支援の観点から、学生たちがどのようなモチベーションを抱き現場で貢献しているかを明らかにすることは、地域総合科学科であるキャリア開発総合学科にとって急務である。

本研究では、卒業生へのインタビューを通じて、図書館司書という仕事への関心、現在の仕事の状況や課題、学んだ知識の活用状況について調査し、教育と現場との接続性を検証する。その結果を基に、今後の支援策を提案し、司書育成教育の改善に寄与することを目的とする。

II. 方法

図書館司書資格は、日本において短期大学や大学で取得できる国家資格の一つであり、専門性の高い職務内容を持つ。しかしながら、資格取得後に司書として働く多くの人々が非正規雇用の現実直面している。この背景には、指定管理者制度や業務委託の増加による正規職員枠の縮小、公共サービスにおけるコスト削減の影響があると指摘されている。一

方で、非正規雇用下で働く司書たちは、多様な業務や地域とのつながりを通じてやりがいや成長を感じている事例も少なくない。

そのため、本研究では短期大学で司書資格を取得した者3名へのインタビューと、資格取得を目指す在校生10名へのアンケート結果を基に、司書として働く者の現状を精査し、その中で見いだされるやりがいや大学の支援を明らかにする。少数の事例だが、就業年数も踏まえた最新情報として有益であると判断した。また、先行研究も踏まえ、資格取得後のキャリア形成における選択肢や支援策についても考察を行う。

1. 背景と先行研究のレビュー

1.1 図書館司書資格の概要

図書館司書資格は、短期大学や大学で取得できる国家資格である。資格取得には図書館学や情報学、図書館実習などの特定科目の単位を修得することが求められる。この資格は、図書館における専門職として、利用者への情報提供や資料管理、プログラム企画など、多岐にわたる業務を担うための基礎となる。短期大学では資格取得を目指す学生のために、実践的な実習プログラムを組み込んでいるが、資格取得後に司書として働く割合は必ずしも高くはないことが指摘されている。(北川)

1.2 非正規雇用の拡大とその影響

日本の図書館において、非正規雇用司書の

割合が増加している。この背景には、指定管理者制度の導入や業務委託の拡大がある。これらの制度は図書館運営の効率化を目的としているが、同時に正規職員の枠を縮小し、非正規職員が主要な労働力となる状況を生み出して）いる。非正規雇用の司書は、業務内容が多岐にわたる一方で、安定性や昇進の機会が限られるという特徴がある。こうした雇用形態の増加は、司書職の専門性やキャリア形成に大きな影響を与えている。（廣森）

また、非正規雇用下での司書の役割の曖昧さが指摘されている。正規職員と非正規職員の業務分担が明確でない場合、非正規職員が過重労働を強いられることがある。この結果、専門性を十分に発揮できないだけでなく、業務への満足度ややりがいも損なわれると報告されている。（大城）

1.3 ジェンダーの視点

図書館司書は女性が多く従事する職種であり、ジェンダーの視点からも課題がある。多くの女性司書が非正規雇用を選択する背景には、家庭との両立や柔軟な働き方のニーズがある一方で、非正規雇用特有の不安定性がキャリア形成の阻害要因となっている。特に、非正規雇用では昇進や専門性の向上の機会が制限されるため、司書職としてのキャリアパスが描きにくい状況が浮き彫りになっている。さらに、女性司書が多いことは、図書館における雇用環境の改善が、ジェンダー平等の観点からも重要であることを示唆している。非正規雇用で働く女性司書が感じるやりがいや課題を可視化し、政策的な支援を行うことが必要とされる。（石川、東）

1.4 先行研究の全体的なまとめ

これらの先行研究は、非正規雇用司書が直面する問題の複雑さを浮き彫りにしている。

資格取得後の進路選択においては、収入の不安定さやキャリア形成の難しさが主要な障壁となっている。一方で、非正規雇用でもやりがいを見出す司書がいることも事実であり、その背景には地域社会との連携や多様な業務経験が関与している。

これらの背景を踏まえ、本研究では卒業生と在校生の視点から、非正規雇用司書の現状と課題を掘り下げていく。さらに、先行研究の知見を基に、進路選択やキャリア形成を支援するための提言を行う。

1.5 調査方法と手続き

3人の現役司書へのインタビューを行った。時期は2024年5月。インタビュー場所は勤務先図書館。筆者との対面で同席者はなし。時間は40分程度で許可を得て録音している。個人が特定できない状態での論文・発表での使用について書面で許可を得た。1名は公務員として市役所に努めたのち司書になった。他2名は卒業後、更新可能な契約の会計年度職員として入職している。加えて短期大学2年生で司書資格ができる学びを行っている者10名に口頭によるアンケートを行った。時期は2024年5月。場所はゼミ教室。他ゼミ生が周辺にいる状態で話を聞いた。時間は5分程度でメモとして記録し文章化した内容を本人に確認してもらった。個人が特定できない状態での論文等の使用について書面で許可を得た。この10名は司書になることを第一には志望していない。質問項目は司書授業に関わる他教員とも相談し決めた。半構造的に以下の内容（表1）を、現役司書には1から11まで、短期大学在學生については、2から4までを口頭によるアンケートとして行った。

表1. 質問項目

1. 司書になってから今までどういう業務をしていたか、そして今どのような業務をしているか教えてください。公務員から司書になった人は、その経緯もお願いします
2. いつ頃から図書館司書の分を勉強しようと思いましたか？
3. そしてそのきっかけについて教えてください。
4. 司書の資格を取得すると、図書館での就職が比較的スムーズにできていましたか？あるいは資格と就職は必ずしも一致せずそれなりに厳しいと思っていましたか？
5. 司書の勉強をしていて良かったと思う事はどのようなことですか？あるいは役に立ったこと、あるいはもっと広く深く知っておきたかったことがあれば教えてください。
6. 逆にあまり業務と関係ないように感じる科目学びがあれば教えてください。
7. 司書以外の勉強でしていて良かったと思うことはどのようなことですか？
8. いざ進路確定という局面になって、司書あるいは公務員になることを他のことよりも優先させていく決めた手になった事はどのようなことですか？
9. 司書として働き始めて
 - 1. 大変だと思うこと
 - 2. 楽しいと思うこと
 - 3. やっぱり思い通りだったこと
 - 4. ちょっと違っていた、と思うこと
10. 司書に向いている人と言うのは、どういう人だと思いますか？
11. これから司書を目指そうと考えている。高校生・大学生に伝えたいことがあれば

Ⅲ. 結果

1. 調査結果

卒業生インタビューについては話題が幅広くなるため業務における具体的な内容などについては割愛し、司書になることへの動機づけを中心に個別にまとめた。在学生アンケートは全員分をまとめて「資格取得への動機と進路選択」と「司書以外のキャリアへの興味」に分けて整理した。

4.1 卒業生インタビューの結果

Aさん：「キャリア形成と地域貢献」 市役所4年、司書4年目の公務員

卒業して8年目の司書は、正規雇用である。市役所勤務から図書館へ異動となった。もともと、司書には興味があったが公務員になることが優先ではあった。しかし図書館実習をした際には、職業としての司書に強い印象を持った。図書館への異動告知を受けた際には驚きと喜びがあった。司書の仕事をするにあたり、大学での学びを復習して取り組み、顧客とのやりとりに齟齬がでないよう、どのような話題にもついていけるよう日々情報のア

ンテナを広げている。移動図書館の運営や地域イベントの企画を通じて利用者と直接関わることで、感謝の言葉や笑顔をもらえるのが励みであると語っている。利用者が継続的にサービスを利用し、地域における図書館の役割を実感できることがモチベーションになっているとのことだ。さらなる異動や配置転換に関しては、新しい業務を経験し、自分のスキルを広げる良い機会であると前向きな姿勢を示している。

Bさん：「やりがいと忙しさの間で」 会計年度職員として2年目

高校時代に進路として「やりたいこと」というより「好きなこと」を思い、本を読むのも図書館も好きだったので、それに関することを調べているうちに、司書という職業がいいと思うようになっていった。そのため進学も資格取得できる学校を選んだ。しかし司書という職業には簡単にはつけない、ということはわかってはいた。他職種で内定もとったが、やっぱりやりたい、という気持ちが強く、最終的に司書になることを選んだ。現在

の業務では授業で習ったことほど作業的には難しいことはしていないが、個人情報扱っていることもあり、接客によっては神経をつかった対応をしなくてはならないし、忙しく動き回ることもある。楽しいといえることは配架や返却カウンターに入るときで、いろいろな本が見えること。図書館という空間が好きで、一冊ずつ本を戻しながら、こういう本があるんだ、と思ったり、読んでみたいと感じたりすること。どこにどの本が配架されるのか実感を持てること。休み時間に本を読むこと。たくさん本を知って、知識を増やしてリファレンスに役立てられたりすること。将来的には公務員の正職員になることも視野にいられている。

Cさん：「キャリアの第一歩として」 会計年度職員として数か月

高校3年生の頃、本が好きだったこと、そして他にしたいと思える仕事なかったことから司書になることを意識する。あまり具体的な相談はしなかったので、大学入学後になって、司書という職業に正職員として就業できることが意外に難しいということがようやくわかってきた。それでも司書なりたいと思いつけていたのは、本に囲まれて仕事があったから。幼稚園の頃から図書館に連れて行ってもらい、その雰囲気がいいなと思うようになっていった。そのため、会計年度雇用であってもかまわなかった。登録作業など、まだ慣れない点もあるが、ボランティア関連の子供相手の授業や、読み聞かせの授業などの経験が、読み聞かせやイベントの企画に役立っており、自分のスキルが日々磨かれていると感じている。また、最も役立った授業は、図書館実習で図書館の雰囲気に触れ、どのように仕事が進んでいくのかを体験することができてよかった。今後は、正職員をめざすと

いうことも選択肢の一つとして視野にはいつている。

2. 在校生アンケートの結果

資格取得への動機と進路選択

在校生のインタビューでは、「本が好き」という理由で司書資格を目指す学生が多い一方で、進路選択において司書職を選ぶ学生は少ないことが分かった。ある学生は、「司書は門が狭いと聞いて、公務員を優先した」と語り、資格取得自体はキャリア形成の一環と考えつつも、現実的な選択肢として司書職以外を選ぶ傾向があることが見て取れる。

また、「図書館よりも書店の方が自分には合っている」「契約職員では収入の安定が難しい」といった声もあり、非正規雇用のリスクが進路選択に影響を与えていることが分かる。一方で、「資格を取得することは将来的な選択肢を広げるために有用だ」との前向きな意見も見られた。

司書以外のキャリアへの興味

在校生の多くは、司書資格を取得しながらも書店員や接客業、公務員など、司書以外のキャリアを視野に入れている。「図書館という環境は好きだが、自分の性格や生活設計に合う職場を優先したい」との意見が多く、資格を取得する動機としては自己研鑽やスキルアップが主軸となっている。

IV. 考察

今回のインタビューおよびアンケート調査から、図書館員として働くようになる原動力は、本が好き、図書館が好き、その空間にいたい、という思いの強さであることがわかった。一方、司書になることが難しいと思い、あきらめる気持ちを抱くようになることが、司書の道に進まず、ほかの選択肢を優先することに関係している。非正規雇用で働く司書

にとっては、非正規雇用という不安定な立場ながらも、その空間にやりがいが見出されている。市役所から異動した司書は、司書ということだけでなく、それを成長の機会と捉え、新しい経験を積むことに意義を見出している。この違いは、経験年数や職務内容だけでなく、各人のキャリア観や職場環境の影響によるものであると考えられる。

在校生のアンケートからは、資格を取得しても司書職を選ばない理由として、「非正規雇用の不安定さ」「収入の低さ」「将来性の不透明さ」が共通して挙げられた。特に、司書職が限定的な雇用形態であることが、進路選択における大きなハードルとなっていることが確認された。一方で、資格取得自体を自己研鑽やスキルアップの手段として前向きに捉える意見もあり、進路選択の柔軟性を確保するために資格を取得する学生が一定数いることが分かった。

さらに、卒業生と在校生の比較から、現場での実体験がキャリア観に大きな影響を与えていることが示唆される。卒業生は、非正規雇用という制約の中でも業務を通じて得られる達成感や生きがいを語る一方で、在校生は、就職市場での非正規雇用の位置づけや安定性の欠如に対する懸念を強く抱いている。このギャップは、実際に働いてみることで得られる経験と、学生の間にある職業観やイメージの違いに起因していると考えられる。

結果として、本研究からは、非正規雇用司書が感じるやりがいと課題が明確になった。やりがいは、内面的な動機に起因することが多いが、課題としては、安定性の欠如やキャリアパスの限界が挙げられる。また、在校生が司書職を避ける傾向にある一方で、資格自体の価値を認識し、司書以外の選択肢を模索することが分かった。これらの知見は、進路指導やキャリア支援のあり方を再考する際に

重要な示唆を与えるものである。

V. 総合考察

今回の調査結果を踏まえ、大学側としての支援や将来的な研究の方向性について考察を行う。短期大学で図書館司書資格を取得する学生は、キャリア形成において特有の課題と可能性を抱えている。非正規雇用司書のやりがいや課題を包括的に理解し、学生が安心して進路選択を行える環境を整えるためには、以下の支援が求められる。

1. 大学側が行うべき支援

(1) 多様なキャリアパスの提案

非正規雇用司書の課題が浮き彫りになる中、大学側は司書資格を取得した後の多様なキャリアパスを提案することが重要である。例えば、図書館以外でも資格を活用できる業界（出版、情報管理、教育など）の可能性を学生に示すことが求められる。また、卒業生のキャリア実績を可視化し、今回の研究のような具体的な事例を通じて学生に多様な選択肢を提示することが効果的である。

(2) 非正規雇用環境への適応力の強化

多くの卒業生が非正規雇用からキャリアをスタートさせる現状を踏まえ、非正規雇用環境でも自己成長を図るためのスキルやマインドセットを育成するプログラムの導入が必要である。例えば、時間管理能力や柔軟な業務対応力を高める研修の提供、非正規雇用で働く際の権利や待遇に関する知識を身につけるキャリア教育が挙げられる。

(3) 公務員司書試験の支援強化

公務員としての安定した雇用を目指す学生多い。多少ハードルは高くても公務員試験対策にまずは合格しようという気持ちを強化す

るため、図書館司書の魅力の紹介を充実させたり、生涯関連施設など多少関連のある仕事の話提供などが挙げられる。

2. 今後の研究調査の必要性

(1) 非正規雇用司書の長期的キャリア形成に関する研究

今回は特に司書という職業選択へのモチベーションにフォーカスして分析的にまとめている。しかし、非正規雇用で働く司書が、キャリアの中でどのように成長し、正規雇用への移行や新たなキャリアを形成しているのかについて、長期的な視点での追跡調査が必要である。これにより、非正規雇用のメリットと課題をより明確にし、改善策を提案できる。

(2) 司書以外のキャリアパスに関する調査

図書館司書資格を活用した職業が多岐にわたる可能性を探るため、資格取得者がどのような分野で活躍しているのかを調査することが求められる。大学図書館、専門図書館、出版、教育、情報管理分野など、資格の新たな価値を発見することで、学生に対する進路指導をより充実させることができる。

(3) 在校生と卒業生の意識ギャップの分析

在校生が持つ職業観と、実際に司書として働く卒業生が感じる現実との間には大きなギャップが存在する。このギャップを埋めるため、在校生と卒業生の意識や体験を比較する調査を継続的に行い、進路指導やカリキュラム設計に反映させる必要がある。

(4) ジェンダーの視点を加えた研究

非正規雇用に多い女性司書の特有の課題を分析し、働きやすい環境を実現するための政策的提案を行う研究が求められる。ジェン

ダー平等の視点から、非正規雇用全体の問題を解決する道筋を模索することが重要である。

3. 総括

大学側の支援としては、多様なキャリアパスの提示や非正規雇用環境への適応力育成、生涯学習機関としての公務員の役割などの訴求が有効といえる。また、研究調査の面では、非正規雇用司書の長期的なキャリア形成や資格の活用可能性の拡大に関する研究が必要である。これらの取り組みを通じて、学生が安心して司書資格を活用できる環境を整え、進路選択の幅を広げることが期待される。

VI. 文献

- 北川昌子 (2017). 短期大学における「図書館実習」の現状－他大学および大阪城南女子短期大学の場合－. 大阪城南女子短期大学研究紀要, 51, 1-30.
- 廣森直子 (2016). 「専門職」の非正規化によるキャリア形成の課題－図書館司書を事例に－. 青森県立保健大学大学雑誌, 37-44.
- 大城善盛 (2019). 司書職制度の再構築－日本の図書館職に求められる専門性－. 日本評論社.
- 石川敬史, 東聖子 (2015). 十文字学園女子大学短期大学部司書課程の歩み：女性図書館員のキャリア形成をふまえて. 十文字学園女子大学短期大学部研究紀要, 45, 119-142.